

## 4. 日本海底棲生物調査

担当者 技師 沢田 兼造  
 " " 富永 武治  
 瑞鷗丸 船長 橋本 留蔵

### I 調査目的

本県日本海嶺作崎沖合における、主要底棲魚族の時期別、深度別漁獲組成回遊生態等を把握し、底びき網漁業の発展に資する。

### II 調査内容

(1) 調査期間 昭和43年12月7日～昭和44年3月29日

(2) 調査場所 青森県日本海沖合海域

(3) 調査項目

(イ) 魚種別、月別漁獲高

(ロ) 操業海区別漁獲高

(ハ) 月別漁獲推移

(4) 調査方法 試験船瑞鷗丸(40.81トンディーゼル160PS)1艘びき底びき網漁法により調査

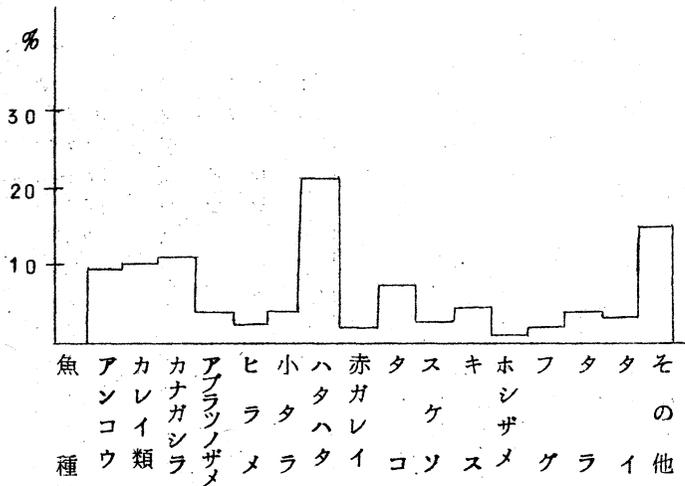
### III 調査結果

操業日数は31日、曳網回数116回(中、曳網不能回数9回)で、総漁獲量は、5,699<sup>Kg</sup>であった。漁獲物組成及び漁獲高は第1～6表、第1.2図のとおりである。

第1表 調査期間中における漁獲物の主な魚種組成並に漁獲高

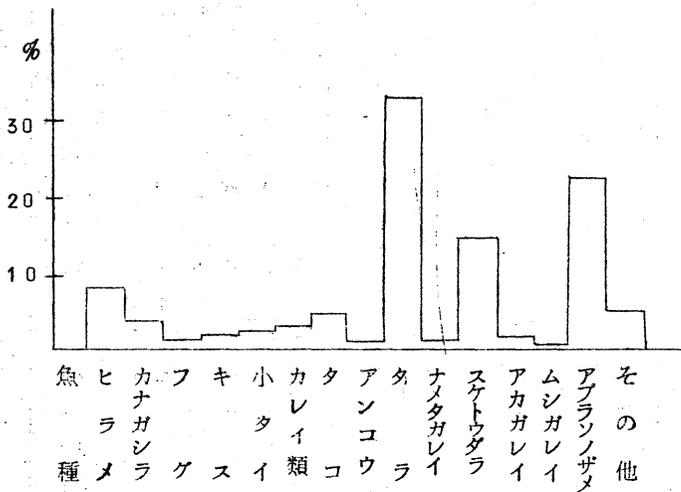
魚種別	12月	1月	2月	3月	計	%
アソコウ	135 <sup>Kg</sup>	18 <sup>Kg</sup>	203 <sup>Kg</sup>	121 <sup>Kg</sup>	477 <sup>Kg</sup>	8.36%
カレイ類	150	44	166	36	396	6.94
カナガシラ	156	64	116	40	376	6.59
アブラツノザメ	50	470		10	530	9.29
ヒラメ	35	163	261	295	754	13.23
小タラ	45				45	0.89
ハタハタ	310		17		327	5.73
赤ガレイ	18	30			48	0.842
スケトウダラ	40	305	16		361	6.33
タコ	110	99	111	35	355	6.22
キス	57	32	25	228	342	6.00
ホシザメ	5			20	25	0.38
フグ	15	14	39		68	1.19
タラ	50	675	15		740	12.98
小タイ	40	22			62	0.108
ナメタガレイ		6			6	0.01
ムシガレイ		4	93	24	121	2.12
エビ			18		18	0.315
ババガレイ			80	25	105	1.84
マガレイ			6	43	49	0.859
その他	204	105	100	85	494	8.668
計	1,420	2,051	1,266	962	5,699 <sup>Kg</sup>	100%

第2表 瑞鷗丸魚種別漁獲高(12月分)



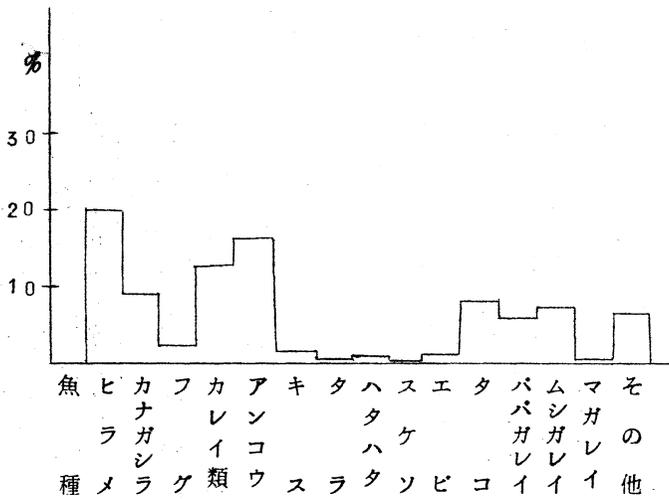
魚種別漁獲高累計	
魚種	数量
アンコウ	135kg
カレイ類	150
カナガシラ	156
アブラツノザメ	50
ヒラメ	35
小タラ	45
ハタハタ	310
赤ガレイ	18
タコ	110
スケソ	40
スキ	57
ホシザメ	5
フタ	15
タラ	50
タ	40
その他の	204
計	1,420kg

第3表 瑞鷗丸魚種別漁獲高(1月分)



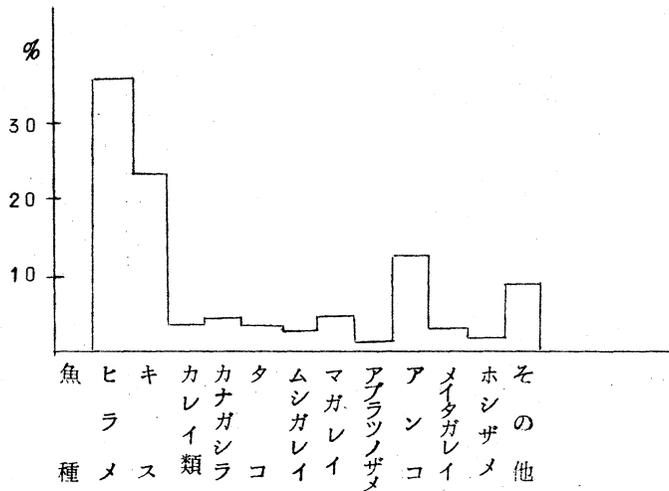
魚種別漁獲高累計	
魚種	数量
ヒラメ	163kg
カナガシラ	64
フタ	14
スキ	32
小タ	22
カレイ類	44
タコ	99
アンコウ	18
タラ	675
ナメタガレイ	6
スケトウダラ	305
赤ガレイ	30
ムシガレイ	4
アブラツノザメ	470
その他の	105
計	2,051kg

第4表 瑞鷗丸魚種別漁獲高(2月分)



魚種	数量
ヒラメ	261Kg
カナガシラ	116
フグ	39
カレイ類	166
アンコウ	203
キス	25
タバコ	15
ハタハタ	17
スケソウダラ	16
エビ	18
タバコ	111
ハバカレイ	80
ムシガレイ	93
アカガレイ	6
その他	100
計	1,266Kg

第5表 瑞鷗丸魚種別漁獲高(3月分)



魚種	数量
ヒラメ	295Kg
キス	228
カレイ類	36
カナガシラ	40
タバコ	35
ムシガレイ	24
マガレイ	43
アブラツノザメ	10
アンコ	121
ババガレイ	25
ホシザメ	20
その他	85
計	962Kg

第6表 魚区別、水深別、漁獲高並に操業回数(操業海区図別紙第7表)

操業期間	操業位置	漁場水深	操業回数	漁獲高	%	操業期間	操業位置	漁場水深	操業回数	漁獲高	%
S 43年12月 S 44年3月	この24	85~105 <sup>m</sup>	1回	32 <sup>Kg</sup>	0.6	S 43年12月 S 44年3月	この26	95~120 <sup>m</sup>	2回	22 <sup>Kg</sup>	0.4
"	きの25	240	4	22	0.4	"	その14	240~290	1	200	3.5
"	なの14	260	4	294	5.2	"	れの12	250~300	2	164	2.9
"	ねの13	150~170	5	361	6.3	"	ねの10	230~270	1	0	0
"	くの24	180	3	156	2.7	"	やの21	95~100	3	106	1.9
"	えの20	140	1	35	0.6	"	れの10	245~290	2	600	10.5
"	うの20	140~170	1	55	0.9	"	れの11	250~300	1	100	1.8
"	うの21	220~250	1	75	1.3	"	くの22	120~140	11	339	6.0
"	けの25	90~110	2	117	2.0	"	れの14	300	2	92	1.6
"	この25	95~170	6	220	3.8	"	いの3	140	1	544	9.5
"	ふの25	120	11	696	12.2	"	いの4	180	1	76	1.3
"	るの25	95~110	1	73	1.3	"	れの13	280	1	19	0.3
"	まの23	90~120	12	418	7.3	"	やの23	95~120	5	126	2.2
"	をの23	170	4	48	0.8	"	なの10	230~270	5	153	2.7
"	なの9	215~255	1	50	0.9	"	やの22	90~120	8	170	2.9
"	まの22	90~110	2	50	0.9	"	やの24	100~120	2	46	0.8
"	けの23	90~120	5	145	2.5						
"	けの24	90~150	4	95	1.6	計	34海区		116回	5,699	100%

図 1 操業海区および曳網回数

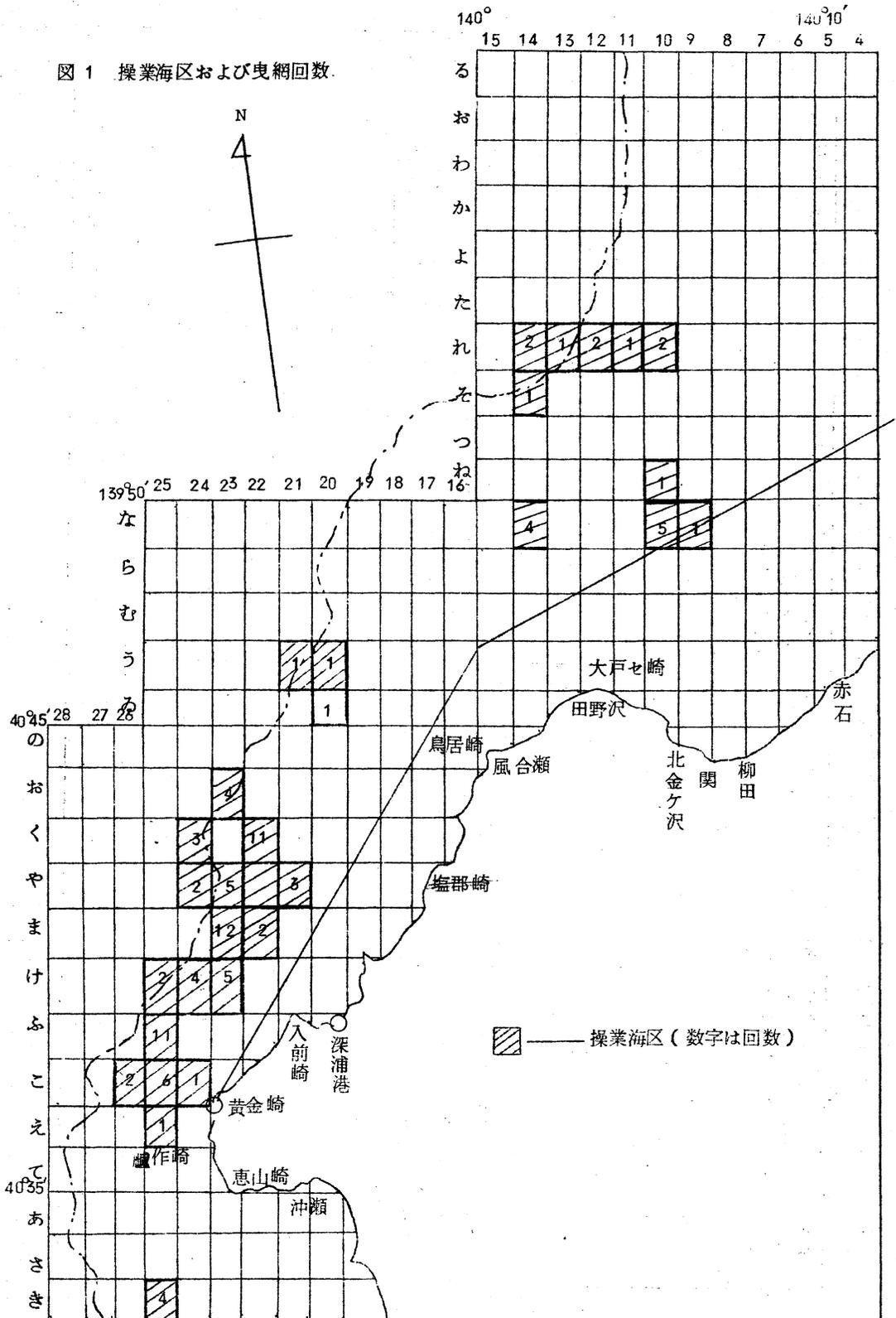
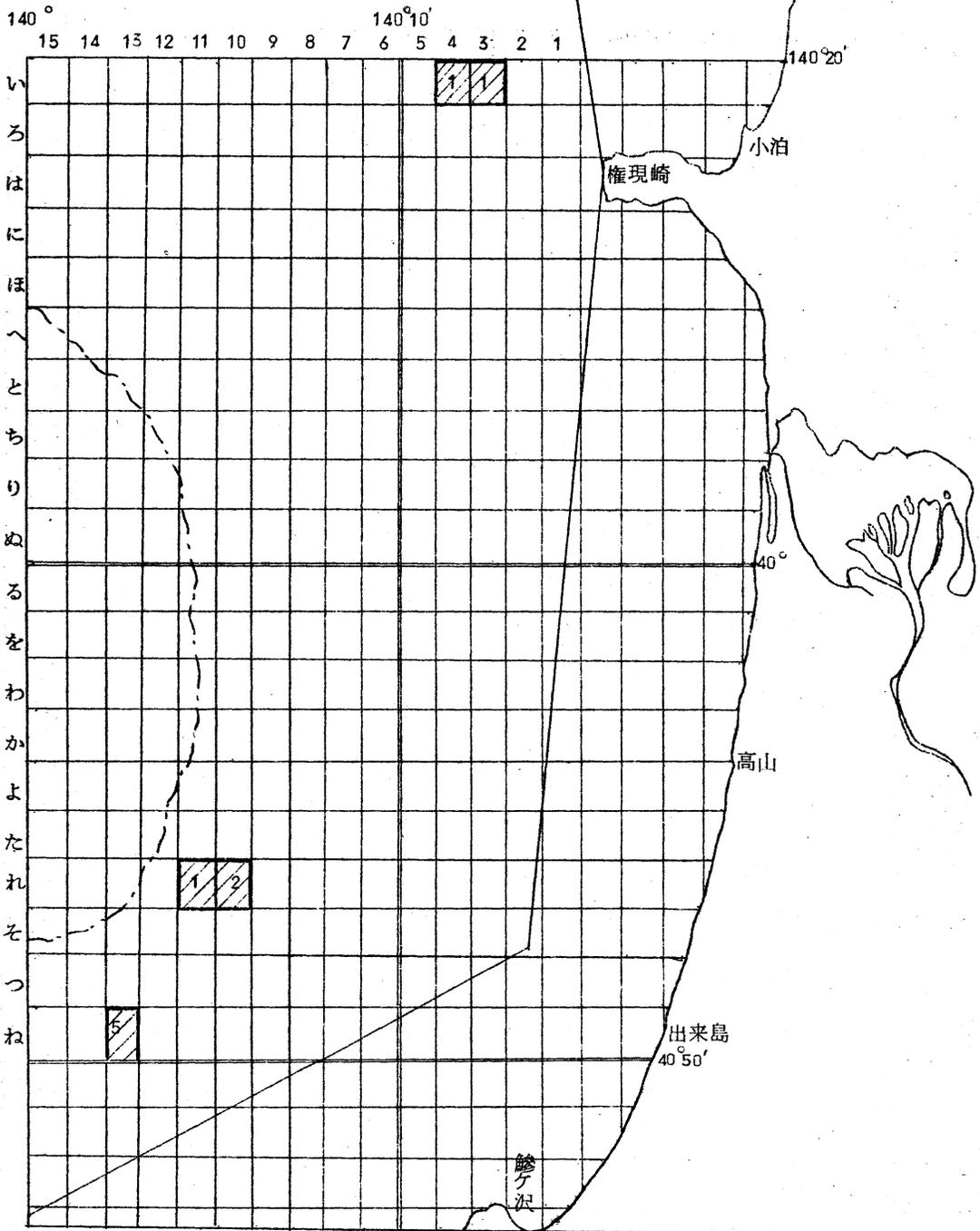


図 2



## VI 考 察

これ迄の調査で深浦港を根拠地とした底曳漁業における資源状態の究明及び未利用漁場の開発は殆んど終了したといってもよい。たゞ調査目的にある底棲魚族の回遊生態調査については、技術的困難もあって余り多く実施されておらず、今後の調査においては、特にこの点に重点を置いて底棲魚族の生活と環境との関連について究明してゆく必要がある。